

●第2回「伊藤喜栄塾・地歴学講座」

平成25年7月13日
「伊藤喜栄塾」運営事務局／今枝忠彦

■第1回講座概要

- ・出席者25名
- ・講義 1. 地域（地域政策）づくりにおける戦略と戦術
2. 地域づくりの戦略と地歴学視点・手法
3. 地域づくりの戦術と工学的（技術論的）視点・手法
4. 地域づくりにおける使用価値と価値の関係
5. 地域づくりの主体の問題
6. 地域とは何か
- ・意見交換：地域づくり協議会、一宮気質、一宮の復興・再生、濃尾平野の集落地形成など
※以上、「地歴学ノートNo.1」（p2～p5）参照

■プログラム（予定）

- ・前期、後期に分けて実施を検討中です。前期、後期とも3回ずつを想定しており、前後期の間、「地歴学」の発展的テーマ設定のもと、伊藤先生を含むパネラーをお招きし、シンポジウムを開催する予定です。
- ・各回の講義内容等は以下のとおりです。伊藤先生の講義の後、休憩を挟んで、今枝の進行で質疑・意見交換を行います。その際、一宮市に関する資料・データ等を意見交換の素材として準備します。

	講義テーマ	質疑・意見交換（提供資料）
第1回：6月8日 14:00～16:30（済）	・「地歴学」について	一宮市の現況・その1 （市街地変遷、都市形成経緯等）
第2回：7月13日 17:00～19:00	・現代日本の地域問題と一宮① ：歴史から学ぶ	一宮市の現況・その2 （人口・施設、広域都市圏等）
第3回：8月10日 14:00～16:00	・現代日本の地域問題と一宮② ：将来を展望する	一宮市の現況・その3 （施設分布等）
シンポジウム 10月（未定）	テーマ：「産業コミュニティ」（産業と居住の融合）による地域社会再生（仮）	
第4回 12月14日	・生活空間① ：近代以前	一宮市のまちづくりを考える・その1
第5回 平成26年2月8日	・生活空間② ：近代以後	同上・その2
第6回 3月8日	・まとめ ：地域と政策	同上・その3

（開催日は変更の場合があります。ご了承下さい。）

■地歴学講座ノート No.1 (文責：今枝)

I. 講義 (要旨)

1. 地域 (地域政策) づくりにおける戦略と戦術

- ・ 地域政策には、自然放置では不都合が起こるので、人間の意志に基づいてより良い状態を取り戻す意味が付随する。
- ・ その考え方には二つあり、経済原則にすべて任せるか、問題を発見して手を打つか。地域政策は、近代の産業革命以降、後者の方向を担ってきた。
- ・ 長い目で考えるのが戦略であり、ショートレンジで考えるのが戦術といえる。地域政策、まちづくりには、戦略が重要である。
- ・ 日本は戦略を考えるのが苦手である。昨今の政治状況からもうかがわれる。日本人は戦略の訓練が欠けている。市民も不得意である。目先の困っていることを考えざるを得ず、ものの見方が短くなる。

2. 地域づくりの戦略と地歴学視点・手法

- ・ 19 世紀ドイツの政治家ビスマルクにことば、「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」にあるように、歴史を学ぶことが戦略を学ぶ手掛かりになる。その意味で、産業革命が歴史的エポックになる。
- ・ 産業革命は良かったのかどうか。産業革命以後、現在の便利な生活を、「エコロジー (生態学)」の視点から見れば、250 年足らずで、地球上の各地が危機に瀕している状況が見えてくる。
- ・ 一宮を独立した 40 万人都市として考えるか、名古屋都市圏を構成する 40 万人都市として考えるかによって、地域づくりとして提案することは違ってくる。
- ・ 独立した都市と考えるならば、所得を生み出す「ベーシックインダストリー (基礎産業)」とその内部循環が重要であり、一宮では戦後のある時期まで毛織物がそれを担っていたが、国内市場に留まった。
- ・ ベーシックインダストリーに付随して起こる産業が「ノンベーシックインダストリー」であり、サービス業、飲食・小売業などである。この組合せが産業を考える手掛かりとなる。
- ・ ベーシックインダストリーと同様の経済効果を持つものに、県庁などの行政施設、軍・自衛隊関連施設、大学などがある。
- ・ 歴史の視点では、現在につながる過去として、産業革命まで遡ることが適切と考えられるが、それを最初に、独自に成し遂げたという意味で、イギリスの産業革命には学ぶ意義が大きい。
- ・ “transformation of region”は、かたちを変えることと機能を変えることが一体化されている。一宮では、着尺セルからスーツ地への転換であり、そこに地域づくりのヒントを得ることが大切である。

3. 地域づくりの戦術と工学的 (技術論的) 視点・手法

- ・ 現在の都市工学、都市計画は目の前の困ったことを除去するショートレンジであるが、本来、まちづくりは、長い目で、地域の発展を念頭に置いた提案が必要である。
- ・ 経済学の「合成の誤謬」は、家計や企業の個々の単位が合理的であることが国家の経済の枠組みではプラスにならないことを意味する。みんなが貯金をすれば、マーケットが小さくなってしまう。
- ・ アベノミクスは、マクロの合理性を優先し、ミクロの合理性を二の次と考える。個々の赤字は自己責任になる。経済理論に合わせるのではなく、「合成の誤謬」をどうやって突破するかを政策は考えねばならない。
- ・ 地方自治体は国民経済と違って、壁がない。グローバリゼーションは、ひと、もの、かねが自由に動く。現在の経済政策は閉じた中での理論であり、無理がある。開いた状態でどう考えればよいのか難しい。

4. 地域づくりにおける使用価値と価値の関係

- ・ 現在、値打ちの基準は、「使用価値」ではなく、「交換価値」で決められる。価値は、「何に使えるか」という重要な意味を持つ。産業革命以降、使用価値に比例して交換価値が保証されるということがなくなった。

- ・まちづくりにおいても、工学的なアプローチで、使用価値を高める「絵」はいくらでも描けるが、その価値を判断する専門家がない。最も近いのが、地価との兼ね合いで判断する不動産屋であろう。
- ・一宮の駅前には駐車場が多く、他所と比較して貧弱だと批判されるが、名古屋都市圏の中で、パークアンドライドとして確立しており、交換価値から見れば、地主にとっては悪いものではない。

5. 地域づくりの主体の問題

- ・地域は、誰かが、何かの目的でつくるものであって、始めからあるものではない。前近代は、人間がつくってきたが、産業革命以降は、資本がつくってきた。
- ・その際、資本から取り残されるところができて、地域と地域の間で「インバランス（不均衡）」の問題が起きる。それは、社会の仕組みが、前近代・近代に関わる本質的な問題である。
- ・過疎地域、限界集落が問題となっている。笹野も一宮では限界集落に近い。資本に取り残されたところは、本来、公的セクターの手当が必要だが、市にその判断力、調査力、能力があるかどうか懸念される。
- ・一宮市では、「地域づくり協議会」が制度化されようとしている。市の予算も配分される。しかし、インバランスの問題に対して、各協議会が対応できる能力がともなっているか、大変疑わしいと思われる。

6. 地域とは何か

- ・辞書には「地表の表面の区画」としか書かれていない。基本的には、“Area”と“Region”の二つの意味がある。前者は、例えば、2km四方に機械的に切り取ったものである。ドイツ語では、“Gbiet（ゲビート）”。
- ・“Region”は、例えば、笹野という集落（コミュニティ）とその周辺を含む単位である。ドイツ語では、“Landschaft（ランドシャフト）”。生産と消費が直結している生存の単位であり、社会の安定性につながる。
- ・日本では、「地域」が正しく理解されず混乱している。例えば、マスコミでは、地域は地域社会（コミュニティ）のことであり、地域コミュニティなることばもあり、これでは「地域地域社会」となってしまう。

II. 意見交換（論点整理）

●一宮市の“Region”としての集落

- ・一宮市の100年前の市街地図を見るとよくわかる（別添資料 p2）。集落地の周りに田畑が介在する。それぞれの集落地の規模は50〜80戸、約400人〜500人。（今枝）

●地域づくり協議会

- ・葉栗地区の協議会が、今年からスタートした。行政の意図がはっきりしないとを感じる。地域をつくれということなのか、なかみを良くしていけということなのか。お金を管理する仕組みがなく危険である。
- ・市民としては、それぞれの視点からの提案もいいが、行政の姿勢そのものについて関心を持ってウオッチしていかないと税金の無駄遣いとなる思いである。
- ・地域づくり協議会の単位をどう考えるか。中学校区としてのまとまりもあるように見えるが、これでいいかどうか。（今枝）

●近代の空間構造の変化

- ・イギリスでは、“City and it's Reagion”という言い方が使われる。一宮の場合、中心にローカルマーケット（市場）があり、周辺の集落地をつなげている。ヨーロッパでは、マーケットのエリア（局地的市場権）は、2時間程度で歩ける範囲で、15〜20km程度。馬車の使えない日本ではやや狭くなる。
- ・近代になると、中心にはベーシックインダストリー（基礎産業）が立地する。外から所得を持ってくるものであり、工業、政府の金と呼ばれ込む県庁などである。あるいは自衛隊の師団でも構わない。そして、周辺にノンベーシックインダストリーが発達する。サービス業、飲食、小売りなどである（卸売はベーシックである）。

まわりに住宅地が形成されるが、まず、低賃金の居住区があり、外にいくほど高級住宅地が形成される。こうして、同心円的にまちの構造が変化する。“factory community”から、“business community”の空間的構造に変わっていく。

- ・そして、前近代のような権力の象徴としてのまちづくりではなく、市民の生活の改善と連動するまちづくりへと変化していく。エンゲルスの『イギリスの労働者階級の状態』は、“factory community”が“business community”に変わっていく時に、低賃金居住区が悲惨な状態に変貌していく様子を克明に描いて世に問うている。その対象となっているのは、綿工業のまちのマンチェスターである。

●空間構造の変化と一宮

- ・東京は、概ねそのように、江戸から変化していったが、名古屋は不完全である。さらに一宮は、その名古屋都市圏でのポジションがはっきりしていない。また、行政もそういったことを考えたことがない。
- ・一宮の場合、同心円的に順次変わっていったのか。尾西、木曽川は独立して発展してきている。その意味では、単純な市町村合併が良かったかどうか。
- ・一宮は名古屋に近く、通勤の便がよく、地価も安いので、ベーシックインダストリーの代わりに、高級マンション生活者が増えてもいいところだと思う。低所得者向けのマンションばかりのまちづくりでは困る。
- ・尾西の起は、かつて“factory community”から“business community”へと発展した歴史的経緯を持っているが、合併によって、尾西、木曽川の独自性、主体性は弱まってくる。また、名古屋都市圏の中での一宮をどう考えるか、さらに、現在進行中の地域づくり協議会という視点も含めて、この地歴史講座の中で、一宮の地域づくりを考えていきたい。(今枝)

●「お金」に執着する一宮気質

- ・地域性、人間性、市民性などをどう考えればいいのか。例えば、一宮の場合は、お金に執着すること、途中で投げ出してしまうことなどが気になる。(聴講者)
- ・一般的に、商人のまちは、お金に執着する。尾張藩の金儲けの中心は知多である。一宮、羽島、岐阜などは大阪商人の影響が強い。
- ・明治以降の雑貨工業を牽引してきたのは大阪商人である。雑貨工業には繊維も含まれる。大阪商人は、ほとんどのものを外国から引き受けてきて断らない。一宮は断るようになってからダメになった。

●一宮の毛織物

- ・一宮の毛織物は、着尺から洋服物に変わるときに苦労している。大阪の芝川商店からその知恵を得ている。技術は、名古屋に收容されていた青島のドイツ居留民などに学んでいる。
- ・昭和35年ころ、このあたりの機屋さんを全部調べた。関連産業を入れて6,000軒あった。しっかりした基盤があったが、それを活かすきれなかった。国内で十分に儲かっているのに、輸出産業にしなかった。

●一宮気質・その2

- ・一宮、稲沢とも、住む上での魅力をあまり感じない土地柄である。豊田市が挙母市から市名を替えたような地域づくりの意志が見えない。このままだと、高齢化してグレードの低いまちになる。(聴講者)
- ・挙母市から豊田市への変更は大英断である。当時の東三河は愛知県では貧困なところだった。近代になって、“transformation”することがカギであることに早く気づいて乗り換えた。
- ・一宮は、スーツ地で成功して、戦後ガチャ万で国内市場を席卷して儲かったのが裏目に出ている。それと平行して、お金に対する執着が強くなった。

●一宮の復興、再生

- ・一宮の古い地図には、生産と消費が一体化した地域の姿が明快に読み取れる。繊維が衰退し始めた50年前に

立ち戻って考えてもいいのではないか。50年前の絵姿を描くというのはどうだろうか。(聴講者)

- ・ その場合には、地方の中核都市として復活し、それをベースにした周辺の編成ということになる。同心円的にいくか、あるいは多核的にいくか。起、木曾川で受け持つことの分担を明確にすることになる。
- ・ 戦後、一宮市は、全国で最初に計画行政を取り入れたところである。当時の市長である伊藤一（はじめ）さんのもと、市内全体の毛織物の実態を調査した。その流れが消えてしまった。
- ・ 濃尾平野の中で、自然が豊かで、住む魅力のあるのは、木曾川筋である。犬山からの下流がライン川の下流によく似ている。県も一宮市も稲沢市も、古い街道、松並木を見直すべきである。
- ・ また、木曾川沿い、江南から一宮にかけて、高齢者の施設が集積しており、それをサポートする施設が周りに貼付いている。
- ・ 中心部では、本町商店街のアーケードを取って、昔の街並みに戻す。商店街は、周りの購買力が関係するので、周辺と連帯して考える。周りに、そこその所得水準で、こどもが多くなれば、活性化の可能性はある。

●濃尾平野の集落地形成

- ・ 尾張藩による治水工事によってどこにでも集落ができる条件が整った。古い集落と新しい集落があり、新しいものは、残された雑木林などを開墾してつくられたが、与えられた条件の中で一番高いところを選んで、その周りを開墾してつくっていった。

以上